

2022/8/14

ヨハネの黙示録 講解メッセージ㉑

『ヨハネの黙示録 9章前半 一今の意味は、結末によって知ることができる一』

※ 患難への励まし

ヨハネの黙示録は、世間では恐ろしい脅しの書であるかのように思われていますが、実際はそうではなく、私たちに希望をもたらすために書かれた希望の書です。

私たちがこの地上で受ける患難や苦しみは、一人一人異なるものですが、その苦しみには共通点があります。その患難や苦しみに対して、象徴的な表現を使って希望を与えてるのが黙示録です。

黙示録は、人生の終わりの時に向かって何が起きるのかを告げる封印が解かれる形で話が進みます。ここまで6つの封印が解かれ、第9章は、最後の第7の封印が解かれているところです。この第7の封印には、終わりを告げるラッパを持った7人の御使いが登場し、一人一人何が起きるのかを示しています。今日は第5の御使いからです。

「第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなつた。」(黙示録 9:1-2)

「地上に落ちた一つの星」は、悪魔を象徴しており、「太陽・空」は、神の光を象徴しています。煙によって太陽も空も暗くなつたとは、悪魔によって死が持ち込まれたことで、神と私たちの間に煙が立ち上り、私たちが神を認識することができなくなつたことを表しています。

聖書は、この世界を「死の世界」と呼んでいます。「死の世界」とは、神が見えない世界のことです。この世界は、始まりと終わりがある「有限性」です。それは、歴史を刻むということであり、動き続けているということです。すなわち、私たちが住むこの世界は、「今」というところに立ち止まることができません。「今」は瞬間のことであって、「今」をつかんだ瞬間、それは「過去」になってしまいます。この世界では「過去」しか持つことはできないのです。

それに対して、聖書が教えている神は「永遠性」で、朽ちることがない方です。永遠性とは、動かないということです。「イエス・キリストは、昨日も今日もいつまでも変わらない」という御言葉は教えます。

この世界は、悪魔によって死が持ち込まれたことによって、滅びに向かって動く世界になってしまいました。私たちが動き続けているために、静止している神を認識することができないのです。永遠性と有限性は共存できませんから、この世界において

神との接点は、瞬間瞬間でしかありません。そのために、ある時は「神を信じる」と告白しても、時間が経つと共にこの世に流れ、神を信じた自分を忘れてしまい、また神に立ち返ることを繰り返してしまうのです。これは有限性の世界では仕方のことです。神は今私たちに語る神であって、過去に生きた神ではありません。

さて、ここからは、この世界が有限性になったために、何が起こったのかという話が続きます。

「その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。」（黙示録 9:3-4）

この世界が有限性になったことで、人がさまざまな苦しみに合う様子が描かれています。

いなごは、病や災害など、この世界での患難を表します。死が持ち込まれたことで、人間だけでなく、この世界も有限性になりました。そのため、神から離れた自然界は、すべて自立して生きていかなくてはいけなくなってしまいました。その結果、食物連鎖が生まれ、弱肉強食の世界になりました。こうして自然界は人にとって脅威となり、さまざまな病原体で苦しむようになりました。

ところが、その患難は、額に神の印を押されていない人間、つまり、イエス・キリストを信じない人たちにだけ、与えられるというのです。どういうことかというと、イエス・キリストを信じている人間は、どんな患難に会っても大丈夫だ、ということです。それは、イエス・キリストを信じている人間の結末は、天の国に挙げられて復活して生きるということに確定しているからです。何が起ころうともその結論に変わりはないのだから、どんな害を受けようとも、苦しみに会おうとも、大丈夫だと励まされているのです。

額に印を押されている者とは、神に救われた者のことです。また、それは、白い衣を着せられるとも表されてきました。

「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」（黙示録 7:3）

「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」（黙示録 3:5）

同じことが、ヨハネの福音書では、永遠のいのちが与えられると表され、パウロは、靈のからだを着せられると書いています。いずれにしても、救われた者は、永遠のい

のちが失われることは決してありません。そして、その者たちは害を受けることはありません。

※ 神を信じない者に起きること

「しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五ヶ月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。」（黙示録 9:5-6）

続いて、神を信じない者に起きることが語られています。このことを伝えることで、神を信じていない人たちに、信じる決断を迫るためです。

5ヶ月間は、害を加えてもいいが、殺すことは許されなかつたとあります。この「5ヶ月」は象徴的な表現です。それは、この地上で生きる期間のことであって、この地上で生きる期間は限られており、人はその間徐々に衰えて死を迎えるということの象徴です。

そして、人々は、この地上での苦しみがつらいので死を願うが、死ぬことはできないとあります。必ず死を迎えるというのに、死ぬことはできないとは、矛盾しています。いったいどういうことなのでしょうか。

この世界は、死が入り込んで有限性になり、神の光が見えなくなりました。その結果、神との接点は瞬間瞬間に限定され、神と私たちの間には壁ができてしまいました。それが死の世界です。この状態は、神の目からするとすでに死んでいる状態です。死刑の宣告を受けて、確実に訪れる死をただ待っているだけの状態ということです。つまり、私たちはもう死んでいるので、死ぬことはできないということなのです。

死とは、決別するということです。この地上から決別したら、私たちはどこへ行けばよいのでしょうか。死の世界から出ていく先は、いのちです。しかし、どんなに努力しても、私たちは自分の力で死の世界から脱出することは不可能です。つまり、「死を望む」とは、この苦しみからの脱出を意味します。でも、それはできません。神の印が額に押されていない人たちにとっては不可能なのです。

すなわち、信じる者はすでに脱出していますが、信じない者はこの世界から脱出することはできないということです。死の世界で土に返って滅びるしかありません。

これらのことが、ローマ人への手紙では次のように語られています。黙示録は聖書のまとめなので、必ず新約聖書で語られた内容とリンクしているのです。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」（ローマ 5:12）

「それというのも全人類が罪を犯したからです。」とありますが、これは誤った訳です。現在、もっとも権威ある聖書辞書として認められているバウアーという人の書いた辞書の英訳本（ダンカー監修）には、「その結果、すべての人が罪を犯すようになった」という訳も明記されています。

いずれにしても、ここで重要なことは「ひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった」ということです。つまり、この世界に死が入り込んだことによって、全人類が神と関係を持てなくなり、滅びるしかなくなつたので、死んだ状態になったということです。

「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによつてすべての人が生かされるからです。」（Iコリント 15:22）

私たちは生きているように見えますが、アダムにあってすべての人が死んでいます。ですから、私たち生きるようになるためには、イエス・キリストを信じるしかないということです。

生まれながらの人間は、滅びるしかありません。しかし、神の呼びかけを聞いて応答する者は救われました。それが額に印を押されている者たちです。そのことを、イエス・キリストは、このように説明しておられます。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

これが、イエス様が私たちに示された救いの中身です。

死人が神の声を聞く時は「今」です。神との接点は、今だからです。神はすべての人の心のうちに語り掛け、誰もが潜在意識の中でその声を聞いているのですが、その呼びかけが聞こえるのは、心の貧しい者だとイエス様は言われました。苦しい人には神の呼びかけが聞こえますが、今楽しくて仕方のない人に、その声は聞こえません。そして、聞く者は生きるのです。聞く者とは、神の呼びかけに応答する者ということです。それが信じる者です。信じる者は、死からよみがえって生きる者になるのです。

このように、イエス・キリストを信じる者は死からいのちに移された者です。次のように書かれています。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

神の目に映る私たちは、すでにこの世界に対して死んだ者です。それは、いのちに移されたということであって、それが額に神の印を押された者です。私たちは確かにこの地上に生きていますが、イエス様は「あなたはもう神の国ただ中にいる」と

言わされました。それは見えない世界の出来事です。だから、イエス様は、「見えるものは一時的であるから、見えないものに目を留めよ」と語っておられます。それは、この世界に対して死んでいる私たちに対して、死は何の手出しをすることもできないからです。

「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」(ガラテヤ 6:14)

新しい新改訳聖書では、「この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」と、ダイレクトに「私は死んだ」と訳されています。

キリストを信じない者は、死にたくても死ねないけれど、私たちは死んだのだと言っているのです。これをパウロは、「死に預かるバプテスマ」と呼びました。イエス・キリストの十字架は、私たちは死ぬことができ、この世界に決別することができるという希望を示してくださいました。

なぜイエス・キリストは十字架で死なれたのでしょうか。それは、人々の目にはみじめな敗北のように映りました。しかし、実はそうではなかったのです。そこには靈的な深い意味があったのです。私を信じる者は、私と同じように、この十字架によって世界に対して死ぬことができるからよみがえるということを教えるためです。そのためにイエス様は十字架につけられ、3日目によみがえられたのです。

このことを信じなさいと言われているのです。「あなたは死からいのちに移された者、私と同じように十字架につけられ死んだ者だから、この世界とは決別している。だから、この世界でどんなに患難や苦しみがあろうともあなたの結論は決定されているから心配しなくてもよい。」という励ましが黙示録には書いてあるのです。

「そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。頭に金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。また女の髪のような毛があり、歯は、獅子の歯のようであった。また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの響きのようであった。そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五ヶ月間に人間に害を加える力があった。彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシャ語でアポリュオンという。」(黙示録 9:7-11)

ここには、この世界がいかに人を苦しめているかということが象徴的に書かれています。この世界には私たちを苦しめるものが数多く存在していますが、かといって、この世界から脱出することはできません。

そこで、人々は苦しみから逃れるために、この世界の力あるものを神として挙げようになりました。「アバドン」とは「破滅・滅び」という意味であり、王としている闇の中にいる御使いとは、この世を支配する悪魔の象徴です。

キリスト教と他の宗教との決定的な違いは、被造物を神としないところです。真の神を知らない人々は、想像の動物や英雄、あるいは自然など、視覚に訴えることのできる見えるものを神とします。しかし、それで苦しみから逃れることはできません。結局、信じない者はこの世界から脱出することができずに、やがて土に帰ることになります。

※ 信じる者が行き着く希望

なぜ聖書は、額に神の印を押された者の末路と、信じない者の末路とを示すのでしょうか。信じる者は、この世界と決別し、死からいのちに移されます。だから、この世界は、信じる者に何の手出しをすることもできなくなりました。信じない者は、この世の苦しみを受け、そこから逃れるために、この地上に見える安心を求めて生きています。

黙示録にはそのことが対照的に記されているわけですが、このことは、すでに創世記3:19に記されています。

「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならぬ。」（創世記3:19）

アダムが悪魔のことばを受け入れてしまったことによって、この地上に死が入り込んでしまいました。その結果、どのような世界になったかを神がアダムに教えている場面です。

それは、人はこの地上で労苦するようになるが、どんなに苦労したところで最後は滅びるということです。この世界から出ることはできないのです。人は、その虚しさ・つらさから逃れようとして、想像によって死後の世界に希望を持とうとしました。しかし、何を想像しようとも、聖書が教えているのは滅びです。

自分の人生の結末が滅びであるとは、なんとむなしいことでしょうか。私たちの人生の意味を決定づけるのは、「今」ではなく、「結論」です。「あなたは何者か」という問い合わせに対して、その結論が滅びであるということは、その人たちはこの世界で何をしてもむなしいということになります。「たとえ全世界を手に入れても永遠のいのちを損じたら何になるのか。」とイエス様は言われました。

「エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば空の空。／伝道者は言う。空の空。すべては空。／日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。／一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。」（伝道者の書1:1-4）

この世界はすべてが過ぎ去ります。しかし、神はいつまでも変わりません。どんなにこの世にしがみついても、それはすべて失われてしまいます。しかし、神を信じる人々は、この体が朽ちたら、白い衣を着せられ、天国に引き上げられます。それが、よみがえりであり、復活です。

私たちには、この世界でどんなに苦しんでも、どんな患難の中にあっても、よみがえりの希望があります。私たちの結論は、素晴らしい命の冠であることが決まっているのです。ヨハネの黙示録は、この希望に私たちを導こうとしているのです。

「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っていました。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることはありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ 5:1-5）

信仰によって義と認められたということは、自分の努力や行いとは関係なく、神からの招きに応答したことによって救われたということです。

額に神の印が押された人、つまり、白い衣を着せられた人、つまり、死からいのちに移された人、つまり、永遠のいのちを持った人は、どんな状況にあってもこの希望が失われることではなく、この希望によって、患難さえも喜ぶことができるのです。

「神の愛が注がれている」とありますが、「神の愛」は、一言でいうなら「赦し」です。私たちは、神に赦し受け入れられています。それは、無条件で愛され、神の赦しの恵みの中に入っているということです。神はさばく方ではなく、いやし、救う方です。すでに死んでいる私たちにとって、罰は何の意味もありません。神は、罰を与える方ではなく、希望を与える方です。

私たちの人生には、過去しかありませんでした。神は、その過去を白紙にし、あなたの心を未来に開かせます。これが、神の愛が注がれるということです。

あなたの結論は何でしょうか。それは、十字架によってこの世界に対して死に、神と共に生きる者となったということです。死からいのちに移されたとありますが、この世の苦しみからから脱出し、神と共に生きる者となったという、この希望に目を止めるなら、患難さえも喜べるようになります。自分の結論を知ると、「今」の意味が変わるのでです。もし、結論が滅びならば、今何があってもむなしいだけです。しかし、私たちの結論は永遠のいのちです。

「結論に目を留めなさい。十字架に目を留めなさい。よみがえって神と共に生きている、この未来に心を開きなさい。」このことを忘れないようにしましょう。私たちはついこの世界の苦しみに心を奪われてしまい、つらくなってしまいますが、十字架を

見上げると神の愛が見えます。キリストが私のうちに生きているという希望が見えるのです。これが神の武器となります。

つらさを感じる時には祈り、「今」の意味をかみしめましょう。自分はこの世界に対して死んだのだと確認し、希望をもって生きていきましょう。